

近頃の食卓を彩るフルーツの定番はなんと言っても葡萄でしょうか。甘くて冷たくてつるんと喉を過ぎる葡萄は、暑さに疲れた心身を癒やす魔法のような果物。中村草田男の句に「葡萄食ふ一語一語の如くにて」という作品がありますが、今が旬の葡萄の一粒一粒を少しの間じっくり味わいたいと思っています。

さて、葡萄と言えば『イソップ物語』の一つに「酸っぱいブドウ」というお話があります。主人公はキツネ。キツネはおいしそうなブドウを見つけます。しかしそれはとても高いところに実っているので、とても届きません。ブドウをあきらめる際、「あのブドウはどうせ酸っぱくて美味しくないはず」と言い残して立ち去ります。（心理学では自我の防衛機制の働きの一種で「合理化」というのだそうです。）

しかし、この話が長く語り継がれてきたのには、そこに知恵や教訓があるからだと思うのですが、皆さんはそれは何だと思いますか。

私は「切り替えの大切さ」とか、「前向きな諦め」とか、「執着は空しいもの」とかいろいろ考えました。気持ちと折り合いをつける方法も、一つ一つ自分自身で見つけていくものなのかも知れませんね。



我が友は絵本のピッピ葡萄吸ふ 幸恵